



大分の工芸品 展示商談会報告



3月5日に東京銀座の大分アンテナショップの坐来で行われた工芸品商談会に出品しました。来場者は各デパートのバイヤーさんや、セレクトショップの方たちでしたが七島蘭に関しては非常に好評でした。特にラグマットは皆さんの関心が高く取り扱ってみたいという声がありました。

産地としては、生産の仕組みがまだ出来ないで秋頃を目途に販売したいとお伝えしました。セミナーの会員の皆さん頑張りましょう。

「問屋の苦言」

今回は、大分県の工芸品商談会で3月の2日〜5日にかけて上京した折に、練馬区にある守屋商店という畳商家を扱うお店にお伺いして七島イについてお話を伺う事が出来ました。こちらのお店には、70代ぐらいの会長もご



指が抜けるような表もあつたという事で話を聞きながら恥ずかしい思いをしました。また、2009年に大分に行つた時に農家さんと話した時にも、品質に不満があつても返品を受け付けない、七島イはこういう物だと言われ農家さんの主張が強すぎて話が合わなかつたと言われていました。それでも、昭和50年頃までは常時100枚ぐらい置いていたが、最近では国産は扱っていないという事でした。見本などがきちんとしていて、安定的に供給できるようならまた扱ってみたいと言われ私もほっとしました。今後は顧客の苦情をきちんと受け止め、製品の品質を上げることで産地の信頼を取り戻すよう全員で取り組まなくてはならないでしょう。

合同新聞に掲載されました

七島イの工芸品
編み方のコツは？

国東市で七島イの生産加工技術を学ぶセミナーの受講者らが15日、七島イの工芸品を作っていた安田清香さん(仮名)に国東市の指導を受けるため、大分市練馬の中野公民館を訪れた。

大分市に滞在する安田清香さん(仮名)を訪問

国東市最後の伝承者

地域雇用創造推進事業の一環として、生産加工を学ぶセミナー受講者が安田さんから技術指導を受けました。安田さんは、国東市で七島イの工芸品を作る技術を持つ最後の人と言われています。



大分県庁、国東市総合庁舎、国東市役所の3カ所に七島イのイス畳が寄贈されました。

この人に聴く



シリーズ「この人に聴く」第3段は、七島イ農家松原夫妻にお話をお伺いしました。



Q 今年で栽培歴20年目の松原さん。七島イ栽培を始めるキッカケは？

A 前の仕事（溶接関係）を退職後、たまたまTV（NHK）に七島イのニュースが流れていて、子供の時に親を手伝った経験、反収率の魅力などに惹かれた事がキッカケとなり、七島イ栽培を始めました。

Q この20年を振り返り、一番苦労した事。一番楽しかった事は？

A （苦労したこと）平成19年頃から畳屋との直売を始め、景気の変動を感じた事。
※売上の上下が激しく生活設計が立てづらかった（楽しかったこと）栽培を始めて7、8年目から自分の作った表が認められた時。
※言葉で「良い表だね」と頻繁に言われる様になり、色々な方との「輪」が広がって行った時。

Q 後継者育成について

A 「これで生活をして行く!」「やるしかない!」と言う、強い気持ちで取り組んで欲しい。
農業は自分が社長であり経営者なので、今まで培った経験等をフルに活用しながら利益を上げる努力をして行って欲しい。その為の協力は惜しみません。

Q 今後、国東七島イの方向性は？

A 時給バランスのとれる様な「儲かる農業」とし

て発展してほしい。

昔ながらの栽培の助け合いの復活、新しい事への挑戦、新規農業者の増員（特に若い方）など、国東市を代表する産業になってほしいと思います。

Q 松原さんの今後の取り組みについて

A 収量の増産（永遠のテーマかも）や、販売チャネルを増やしたい。
ブログの更新をこまめにしたい。円座やラグマツトも作って見たい。

Q 松原さんにとって「七島イ」とは

A 入学・卒業の無い学校です。

七島イの歴史



五郎右衛門、小舟に身を託し、美しい草を求めて船へ

●第2回 七島イの伝来と、逸話

五郎右衛門は青い草の虜になってしまったのだが、当時は、琉球は一つの王国であり薩摩の支配下でもあったため幕府の厳しい鎖国政策のもとでは琉球へ行くすべはなく、やむなく単身での密航を企てた。

一大決心をした五郎右衛門は薩摩に出向き1艘の船を買い求めて、夜陰に紛れて一人で琉球へ向かう事となった。天候を見定めての出帆であったが運悪く激しい暴風雨に見舞われて、小舟は思うが儘に流されある小島に流れ着いた。五郎右衛門はこの島に上陸しやつの思いで人家にたどり着き、この地が七つの島からなる一つだと分かった。そして、探し求めていた「青くて長い草」の生えているのもわかった。だが、この草を分けてもらえないかと言うと、島民は頑としてこれを拒んだ。島外に持ち出すことは「御法度」とされていたからである。

次回に続く

参考文献「豊後の七島い その歴史を追って」

大分県農業技術センター 前田 哲夫

七島雑感

今を盛りと梅園の里では梅が咲き誇っています。今日は生憎の雨模様で霧がかかっていますが、霧の中からうっすらと見える紅梅を見ているとまるで桃源郷に居るような錯覚を覚えます。生憎の雨と見るのか、桃源郷と見るのかは心の持ち方一つでしょう。七島イも「工芸品」というもう一つの世界が開けようとしています。三十人近くの方が、毎週技術の習得に励んでいます。この方たちには、決して貧乏草ではなく、誇れる地域の宝と見えている事でしょう。

事務局長 細田利彦

会員募集のお知らせ

途絶えつつある七島蘭の保存とともに、新しい地域産業として再生させるという趣旨にご賛同いただける個人ならびに企業の会員の募集をしております。

会員の方には、七島蘭の植え付け、刈り取りの農業体験や、生産者との交流会も開きたいと思えます。途絶えようとしていた七島蘭ですが、大分県や国東市の支援により再生への道筋もようやく見えてきました。

どなたでも気軽に参加できる会にしたいと思います。会員一同、一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。

発行：くにさき七島蘭振興会事務局
大分県国東市安岐町富清3209（二豊製畳内）
電話：0978(65)0800 FAX:0978(65)0801
http://www.shitto.org/